

四日市公害裁判「判決の日」

澤井余志郎『ガリ切りの記』2012年から、表題のところを紹介したい。私は裁判所の前にある市庁舎の屋上に上がり、裁判所前の報告集會に集まった人たちが「勝訴、ばんざい」と手を上げて喜んでいる様子をカメラに収めた。縦長にすると、人々の後ろにコンビナート工場の煙突が見える。工場に勝った、ばんざい、と手を上げている向こうを、ぜんそく患者を苦しめた有害ガスの煙が変わることなく吐きだされている。なんとも言えない気分になる。これからだな、問題は……。あとの仕事が待っている、私はその場を離れた。



9分冊になった判決正本を、野呂汎弁護士事務局長から受け取り、吉村功さんと近くのコピー屋へ行ってコピーを取った。だから、私と吉村さんは、華やかな「勝訴判決報告集會」の現場には立ち会うことはできなかった。

コピー作業が終り、裁判所の前へ行くと、原告患者の野田之一さんが、「病院へ行ってくれんやろうか。疲れたし、来られなかった藤田（一雄）さんにも報告したいで」と言うので、車で病院に向かった。

車の中で野田さんは、「わしな裁判には勝ったけど、公害がなくなるわけではないので、なくなったときに、ありがとうございます、って言ったけど、それでよかったやろうか」と、不安げに言った。

さすが、野田さんや、と私は思った。市役所の屋上で、原告や支援者たちのばんざいと、いつもと変わらぬ工場の煙突の煙を見ながら私の中に浮かんできたもやもやが、野田さんの話を聞いて、すっきりした。「よう言ってくれた、その通りや……」と私は野田さんに同意した。

あとで、テレビで判決報告集會を見ていたら、記者団に「一番うれしかったことは何ですか」と聞かれ、「加害者は工場だと判決ではっきりと言ってくれた。これからは、堂々と工場に公害をなくせと言える。それが一番うれしい」と野田さんは答えていた。

これまで、工場が何か悪いガスを出しているの自分たちはぜんそくになったのだらうと、工場へ行って「悪いガスを出さんでくれ」と言いに行くけれども、どの工場も「うちじゃない、うちじゃない」と責任逃れをしてきた。しかし、判決のおかげで、コンビナートの工場が加害者だとはっきりわかった。つまり、これからが本当の公害反対運動だ、青空をとりもどす運動を堂々とやっていけるようになった。支援者のみなさん、がんばりましょう、ありがとうございますのあいさつができるようにしてください、と野田さんは心からのメッセージを發したわけである。

(2022年7月7日)